

みのの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

特集

タイルが つなげる 現在・過去・未来

石巻市、女川町、仙台市

東日本大震災から早6年。
タイルをキーワードに、
復興が進む宮城県の町を
訪ねました。



タイルの館が復活！

～石巻市・旧観慶丸商店

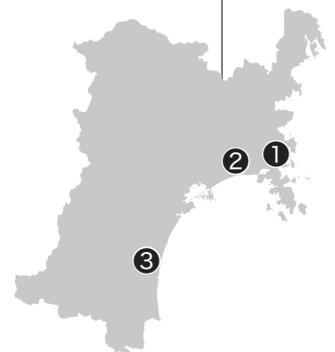
漁港として栄えた石巻の歴史を伝える
全面タイル張りの建築・

石巻市指定文化財旧観慶丸商店。

震災を乗り越え、耐震補強工事を経て
オープンしました。



1階・外壁の墨流しのタイル。
3階のトイレにも使われている。



- ① 女川町・みなとまち
セラミカ工房
- ② 石巻市・旧観慶丸商店
- ③ 仙台市・若林区



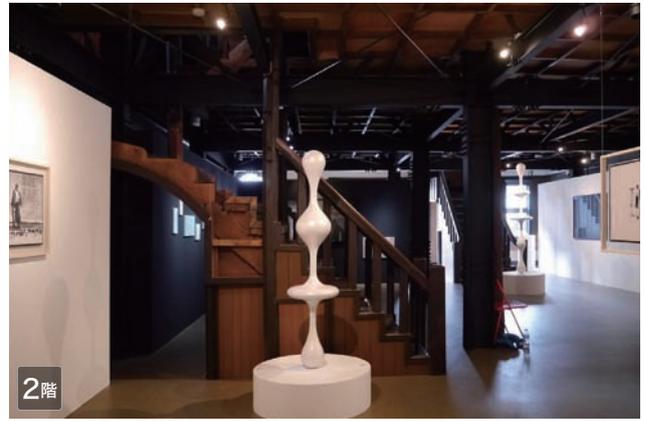
外観。窓の下の多種多様なタイル。



北側のスペイン瓦。軒丸瓦に花の模様。スクラッチタイルは横引き、縦引きを組み合わせて。



1階
アートグッズが並ぶ期間限定の姿。



2階
中央はアート作品。

石巻駅には、仙台市から仙石線の快速で1時間ほどで到着。かつては水運の要として、その後は漁港として繁栄した。さかのぼれば松尾芭蕉も「奥の細道」で石巻を訪れ、その様子を描いている。

駅から徒歩10分ほどで町の中心部に着く。交差点の一画に建ち、存在感を放っているのが、1930(昭和5)年築の旧観慶丸商店である。スペイン瓦の屋根に、なにより全面タイル張り、というインパクト。町のランドマークとしての役割を担うとともに、港町の繁栄を今に伝える。

旧観慶丸商店は当初、百貨店としてオープン、のちに陶器専門店となった。「観慶丸」の屋号は、創業者が千石船の沖船頭(船の責任者)をしており、その船名に由来しているという。江戸方面に荷物を運び、帰りには陶器類を持ち帰ってきた。そういえば、上部の円窓や、ゆるやかな曲線の描く外形は船のようではないか。

震災で1階が浸水

2011年の東日本大震災では町を津波がおそい、北上川沿いの建物の多くが流された。

旧観慶丸商店は1階部分が浸水したものの、大きな

被害は免れた。陶器店は閉店し、その行く末が心配されていたが、2013年、石巻市に建物が寄贈され、その2年後に石巻市指定文化財となった。

2016年2月からの耐震補強工事をへて、文化発信拠点として生まれ変わり、2017年4月2日に晴れて一般公開となった。

訪れた8月は、石巻市、牡鹿半島界限でリボン・アートフェスティバルが開催中(現在は終了)。旧観慶丸商店の1~2階もその会場に使われ、外側のガラスにはデザインが施されていた。館内には現代アート作家の作品が飾られ、再生を祝うかのよう。

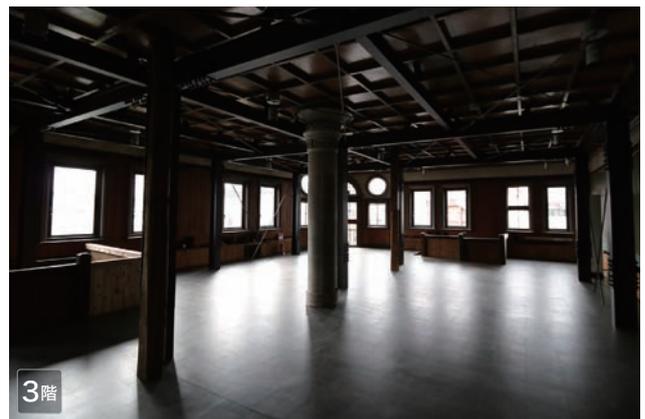
建物は一見、鉄筋コンクリート造に見えるがじつは木造。天井を見上げれば、今回の補強工事で設けられた太い鉄骨が姿をあらわにしている。

今回の耐震補強工事では、全面タイル張りの外壁に負担をかけないように気遣うとともに、著しく剥落の恐れのある箇所は周辺目地に樹脂を注入して剥落止めを行っている。

また、店舗と連結し、住居として使用されていた和館部分も修復され、初お披露目。畳敷きの和室も展示空間となっていた。



3階
3階中央の円柱。柱頭には巻き貝、その下につくのは、この名産の牡蛎のように見える。



3階
奥に円窓が見える。



3階食堂スペースのタイル



3階の食堂スペース。当初はバルコニーで、後に屋根を設置。入り口床部分の六角形タイル(右)。



キリン、椰子、ピラミッドというエキゾチックな絵柄のレリーフ。
右のレリーフはすずらの花。



町の変遷を見届ける

町の人に長く親しまれてきた旧観慶丸商店。今回の再生に際して、高齢の方から「懐かしい」「よく買い物に来た」「食堂でカレーライスやアイスクリームを食べたことがある」「結婚祝いや正月用の食器を買った」という思い出が様々に聞かれた。

また、「建物は常に見ているが、中に入ったのは初めてで感動した」という方も。誰もが訪れることのできる開かれた場所として、新たな役割が期待される。

今後の予定では、11月3日に再開館（現在は準備のため閉館中）。記念行事として、立ち入り制限がされている2階の和室や3階の特別公開、展示スペースの資料解説を実施する。

展示スペースでは旧観慶丸商店関係資料や、毛利コレクション*を展示。また、石巻市金華山灯台が国登録文化財に登録されたこともあり、企画展として11月13日まで第二管区海上保安本部所有の金華山灯台資

料の展示がされる。

その後は展示替えを行いながら、市民や観光客に石巻の歴史文化を知ってもらえるような展示を行っていくとのこと。

旧観慶丸商店をあとにし、北上川方向に歩けば、更地だった場所にマンションが建ち、新築の店舗がにぎわいを見せている。

町の風景が移り変わっていくなか、このタイルの館は、これからも変わらずこの場所に建ち、町の未来を見届けていくことだろう。

*毛利コレクション

石巻市の故・毛利総七郎氏が70年をかけて収集。歴史・民俗・考古・民族(特にアイヌ関係)・美術工芸品・研究資料に分けられ、貴重なコレクションとして全国的に知られる。



商店街・シーパルピア女川の壁面を飾るタイル。

スペインタイルが町を彩る

～女川・みなとまちセラミカ工房

震災で町の8割が消失した女川町。
新しくつくられていく町に
色鮮やかなスペインタイルが輝いていました。

石巻駅から石巻線に乗り、約30分で女川駅に到着。改札を出てすぐ目の前に広がる商店街、シーパルピア女川の一画に「みなとまちセラミカ工房」がある。店内には可愛らしくカラフルなタイルが並ぶ。

表面がぷっくりとふくらんでいるタイルは、スペインタイルの技法で作られている。材料もスペインのものだが、絵柄は女川らしく、大漁旗や魚、また名産のほや、なんてユニークなものもある。

セラミカ工房のタイルは、店内にとどまらず、商店の看板や、集合住宅のプレートなど、町のいろいろな場所で見ることができる。

笑顔で迎えてくれた工房の代表・阿部鳴美さんに、女川とスペインタイルの関係について聞いた。



店内の様子。奥にタイルの制作スペースがある。



工房の外観。看板は絵付けのスペインタイル。

陶器づくりからタイルへ

元々ものづくりが好きで、仲間同士で趣味の陶芸を楽しんでいた阿部さん。その生活を一変させたのが、2011年の東日本大震災。陶芸を行っていた場所や自宅、そして仲間も一人、失った。

避難所から仮設住宅に移り、生活も少し落ち着きを取り戻し、気持ちに余裕ができはじめたとき、もう一度陶芸をやりたいと考えた。そんななかで出会ったのがスペインタイルだった。

「町の復興を考える会合に参加したとき、女川とスペインのガリシア地方が似ていると聞きました。過去に津波の被害から立ち直ったこと、三陸リアス式海岸のような環境。そこで、異文化交流をしたいという話が持ち上がりました。タイルに注目をした方がいて、焼き物つながりで、やってみないかと紹介されたんです」



女川らしい
絵柄のタイルたち

タイルの絵柄は地元のイラストレーターの協力を得た。



大漁旗(左)、女川名物のほや(右)



伝統芸能の獅子舞が
船に乗る。

タイルの絵付けを体験しました！



980度の
窯で焼き上げ、
できあがり！

①絵柄を素焼きのタイルに写しとる。②色の配置を考える(写真は顔料)。③スポイトを使って顔料を流し込む。④色付け完成。アイシングクッキーみたい。絵柄は工房のキャラクター・セラくん。

これまでお皿や茶碗をつくってきたのに、いきなりタイルとは戸惑いがあったのではないかと聞くと「タイルの絵付けには絵心が必要と思いましたが、ものづくりは好きだったので興味津々でした」とのこと。

東京のスペインタイルの教室に通ったのは2012年の1~2月。スペインのバレンシア近郊の町への研修旅行にも参加。出発日は奇しくも3月11日だった。

「よりによってこの時期に、という気持ちも大きかったです。でもスペインではタイルがいろんなところで輝いていて、元気をもらいましたね。博物館では何百年も前のタイルが展示してあり、それを見たときに、当時それをつくった人とつながれたような感覚になったんです。

女川の町が新しく生まれ変わるときに、タイルで色鮮やかに町を彩りたい、タイルに私たちの思いをのせ

て100年、200年先の人に届けたいと、そんなふうに思っただけで帰ってきました」

帰国後は、引き続きタイル教室に通い、陶芸の仲間や、子育て中の女性を引き入れ、事業所を立ち上げた。家を建てるなど、これからお金も要するため、仕事として収入を得ていこうという考えからのこと。まちづくりに貢献したいとしてNPO法人とした。

タイルの制作工程はまちづくりに似ているという。「最初は茶色の素焼きの状態。それは震災後のがれきが片づけられた女川の町そのものです。まちづくりの青写真がデザインのシートです。それをタイルに写しとって、色づけをして焼き上がると鮮やかなタイルになります。タイルをつくるうち、女川のまちづくりや、何年か後の明るい未来が想像できたんです」

工房ではタイル(75ミリ角)の絵付けを体験できる。「メモリアル体験」では、タイルを2枚制作し、1枚は手元に、もう1枚はシーパルピアの一画に飾られる。このメモリアルタイルは現在850枚以上にもなる。

工房でもらえる「女川タイルさんぽMAP」にはタイルが使われている場所が記されている。タイルが増え、町も変化し、MAPは3度更新されている。「町がつくられていくとともに、タイルもどんどん増えていきます」と、阿部さん。彩りを増していく町の姿をまた見に訪れたい。



工房の代表・阿部鳴美さん。



タイルが伝える生活の記憶

～写真展「タイル・ルート・トタン—荒浜・藤塚と浪江の記録—」
(せんだいメディアテーク)

津波で壊滅的な被害を受けた仙台市若林区荒浜、藤塚。
そこに残されたタイルが伝えるものは—



せんだいメディアテーク7階ラウンジでは写真展「タイル・ルート・トタン」を開催中(～10月1日まで)。

展示された写真には、雑草が生い茂る荒涼とした風景のなか、マジョリカタイル*、モザイクタイルがうつりこむ。色のない地で、タイルがひととき鮮やかに見えるだけにその姿は痛ましい。これらの写真は、東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた仙台市若林区荒浜、藤塚で撮影されたものである。

浴室やトイレなど、普段は公にならない、プライベートな空間のタイルは、震災前はたしかに存在していたその家、そして生活の形見のように思えてくる。

撮影者は、仙台市出身の1級建築士・高橋親夫さん。1984年から変わっていく故郷の風景の写真撮影をはじめ、東日本震災後は荒浜や浪江等で記録を続ける。



会場のパネルでは、高橋さんの思いが綴られている。「やがて破壊された家財や建物が取り除かれてゆき、その下から荒浜や藤塚地区のそれまでのたくさんの住居跡が現れました。この地域に地層のように残されていた生活時間や文化の重なりは、佇んでいた私にたくさんのことを語りかけてきました。私は自分の生い立ちと重ねながら残された家の『声』を聞き取ることにも夢中になっていきました。(後略)」

その声は、たとえば「家を建てた時の喜び」「長年の夢や希望やアイデア」「職人たちの心意気」であるという。なにかの存在が失われる際に行なわれる「悼みの作業」は、建物においても必要なのだと思う。

会場では展示写真に加えて、写真ファイルを自由に見られるようになっており、その枚数は膨大である。それぞれの写真に「150角タイル張り」「モルタル鏝押さえ」など施工技法も記載。撮影場所も地図に記しており、貴重な記録となっている。

会場では、福島県浪江町でトタンを写した写真を併せて展示。このトタンも原発事故後に隣接する建物を解体することで現れたものである。

復興の傍らで、記憶にとどめておくべきことがあることを思い起こさせてくれる展示である。

*多彩色のレリーフを施した装飾タイル。

タイルの職人技と楽しさを伝える

さる8月9日(水)～11日(金・祝)、
東京国際フォーラム(東京都・有楽町駅すぐ)にて
「ものづくり・匠の技の祭典」が開催されました。



会場中央では、建前・上棟式・解体の工程を披露。



茶室「匠創庵」。手前部分が庭(水辺)をイメージしたタイル。



門脇氏によるイタリアのプラチナモザイクを使用したバッグの作品(上)。左官職人・挟土秀平氏の作品(左)。

「ものづくり・匠の技の祭典」は、昨年に続き2回目の開催となる。広い会場では、各地から集まった日本のものづくりの伝統を継ぐ約80の団体が、「衣」「食」「住」「工」および、「伝統工芸」「全国」のゾーンに分かれ、各ブースで技術・技能の実演をするほか、逸品の展示を紹介。工芸品づくりなどの体験もあり、夏休み中とあって子供たちも多く訪れ、にぎわいを見せていた。

「住」のコーナーでは、昨年に続き、東京都タイル技能士会がブースを設け、「楽しい!モザイクアート体験」として、モザイクコースターづくりの体験指導を開催した(参加費は500円)。「昨年参加して、今年も来ました!」と声をかけるリピーターもいて、すぐに1時間20名の定員に達し、順番を待つ行列ができるほど。たくさんのモザイクタイルを前に、デザインを考える姿は、大人も子供も真剣そのものだった。

コースターの枠にモザイクタイルをボンドで自由に張ったあとはタイル技能士さんが目地をつめて完成。乾く時間を要するため、完成は約30分後となる。受け取りに来た参加者は、完成作品を目にし「目地を入れると見違えますね～」と驚き、感激の声を上げていた。

しょうそうあん 茶室「匠創庵」

昨年の同イベントで制作された数寄屋造りの茶室「匠創庵」を今年も設置(タイル制作担当は、(株)梅村タイル店 Tile Style深大寺のタイルスタイリスト・上野京子氏、(株)アンドータイル代表・安藤 健氏、タイル職人・門脇英明氏)。

タイルは茶室と庭を彩る水辺のイメージで建物の周囲の部分に使われている。葉形のタイルで色は深みのある青色。門脇氏の作品であるタイル造形作品「亀」が泳ぐ。「匠創庵」を紹介するパンフレットでは、「侘び寂びが表徴された茶室空間に俳諧のもつ軽みをタイルで表現」と解説されていた。

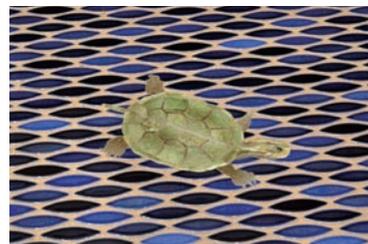
上野氏は、東京都タイル技能士会の推薦により、優れた技能をもつ女性として「匠なでしこ」の表彰を受けた。



ボンドを手にし、制作に没頭する参加者たち。



コースターづくり体験参加者の作品。



タイルの造形作品「亀」。